

自己肯定感と親の養育態度

－ 成功・失敗体験時における賞賛・叱咤体験に焦点を当てて －

片 平 実 希

問題・目的

近年、他者との関わり方が未熟な子どもの増加が指摘されている。中央教育審議会（2005）が教職員に行った調査でも、小中学生のコミュニケーション能力の低さについて言及されている。久芳・竹村（2004）は、このような子どもは、自信のなさや自己肯定感の低さもうかがえると述べている。また、自己肯定感が高い者は、アイデンティティが確立され、ストレスマネジメント力も高く（田中・福井・並川・渥美・三保・榎本・浦田・亀田・谷・大西・中谷，2010），精神的健康と密接に関連している。このことから、教育現場などで自己肯定感を高めることについて議論されることも多い（深谷，2010；小笠原，2016）。

自己肯定感 心理学の分野で自己肯定感とは、自己に関する研究の中で自尊感情、自己肯定感、自己評価などの言葉で研究されてきた。しかし、これらは研究者間で明確には区別されていない。田中（2011）によると、自尊感情とはSelf-esteemの訳語で、Rosenbergが定義した「特定の対象、つまり自己に対する肯定的あるいは否定的な態度」という考え方が一般的だと述べている。Rosenberg（1965）は、自尊感情には自分を「たいへんよい（very good）」と考えること、「これでよい（good enough）」と考えることの2つの意味があり、精神的健康に重要なのは「これでよい」という意味での自尊感情であると考えた。さらに、Self-esteemの重要な概念に、「respect」日本語で言う「尊敬」がある。しかし、日本人にとって自分を尊敬するということはあまりなじみがないため、田中（2011）は自己の評価的側面である自尊感情の下位概念として、自己肯定感を「自己に対して前向きで、好ましく思うような態度や感情」と定義した。本研究でもこの定義を使用する。

自己肯定感と養育態度 自己肯定感に影響を与える要因として様々なものが挙げられる中、多くの研究で親の養育態度との関連が指摘された。原

田（2008）は、養育態度を親が子を育てるにあたり、意図的あるいは無意図的にとる一般的な態度・行動だけでなく、親としての自覚、子どもへの関わり方、子育ての価値観を含めるものとしている。桂田・石・山下（2010）は、大学生を対象とした研究で、高い自尊感情を育てるためには、愛情や共感だけでなく、過保護にならず自律を促進する養育態度が重要であり、特に母親が過保護でないことが自尊感情にプラスの影響を与えることを明らかにしている。このことから、自己肯定感においても、親の愛情や共感、自律を促す養育態度が高い自己肯定感を育てると考えられる。

成功・失敗体験 菊池（2010）は自己肯定感と幼少期の成功体験との関係を示唆している。また、塩澤（2010）は、子どもは叱られるとき、納得できれば前向きに課題を受け止め、解決に向けて努力すると述べ、さらに教育者の立場から褒めるときは子どもが本気で頑張ったのかを見抜くことが必要であり、叱られ、励まされたからこそ味わえると述べている。つまり、賞賛・叱咤のバランスが大切だといえる。しかし、これらに関して実証的研究はほとんどされていない。

そこで、本研究では自己肯定感に影響を与える成功・失敗体験時の親の養育態度について、賞賛・叱咤に着目して検討することを目的とする。

仮説 ①成功・失敗場面において、「受容」「指導」「意欲促進」「放任」「賞賛」「叱咤」といった養育態度が、自己肯定感にどのように影響するか探索的に調査する。

②成功・失敗場面を複数設け、具体的な場面の違いが自己肯定感にどのように影響するかについて調査する。

③偶然に起きた成功場面や意欲的に取り組んだ失敗場面を設定し、子どもがどれだけ本気で取り組んだかで自己肯定感に差があるか調査する。

④養育行動の項目で因子分析を行った後、親の養育行動でクラスタ分析を行い、クラスタの特徴を見ることで、「受容」「指導」「意欲促進」「放任」

「賞賛」「叱咤」の6つの養育行動がどのように組み合わせられて養育態度として形成されているのか、またその組み合わせが自己肯定感にどのように影響を与えているか調査する。

方法

研究方法：質問紙調査

研究協力者：A県に所在する2校の小学3～4年生184名（有効回答者138名）。

調査期間：2016年10月～11月

手続きと倫理的配慮 小学校に対し、書面にて研究協力をお願いを行った。その後、担任がクラスごとに質問紙調査を実施した。質問紙調査を行う前に、教示文を読み上げ、研究目的や個人情報の取り扱い、回答が任意であること、成績に関係のないこと、匿名であることの説明を行った。その後、同意を得られた方にのみ回答してもらった。

回収方法 回収は、担任が表紙を上にした状態で後ろの席から回収した。その後、すぐに封筒に入れ、封をしてもらった。

使用尺度：1) 自己肯定感尺度

田中（2011）が作成した1因子8項目からなる「自己肯定感尺度ver.2」を使用した。研究協力者の精神的負担を考慮し、一部表現を変えた。項目は、①私は、自分のことを大切に感じる。②*私は、時々、いなくなった方がましだと感じる。③私は、いくつかの長所を持っている。④私は、人並み程度には物事ができる。⑤*私は、後悔ばかりしている。⑥*私は、何をやっても、うまくできない。⑦*私は、自分のことが好きになれない。⑧私は、物事を前向きに考える方だ。（*は逆転項目）

2) 成功失敗体験時の親の養育態度尺度

岩崎（2009）を基に本研究で作成した、子どもを評定者とする8場面における、「受容」「指導」「意欲促進」「放任」「賞賛」「叱咤」の6つの養育態度に対する5段階評定の質問紙を使用する。場面構成は①テストでよい点をとれたとき②体育で、前よりもうまくなってきたとき③自分で工夫して何かをつくったとき④かけっこでほかの子が転んだので、勝てたとき⑤お皿洗いをし、お皿を割ってしまったとき⑥忘れ物をしたとき⑦宿題をしなかったとき⑧テストで悪い点だったときである。

結果

まず、養育態度の構成を確かめるために因子分

析を行い、[努力場面におけるポジティブな関わり][放任][叱咤][失敗場面の受容・指導][意欲承認][楽観的][気持ちへの寄り添い][優しさ][溺愛][要求水準が高い][成功場面の厳格]の11因子が抽出された。次に、11因子の合成変数得点を基に研究協力者をクラス分析で分類したところ、『関わり・要求高』群、『成功場面の厳格・失敗場面の優しさ』群、『ポジティブな関わり高』群、『叱咤・激励』群、『叱咤・放任』群、『無関心』群、『ポジティブな関わり低』群、『子どもへの寄り添い』群、『賞賛』群、『関わり低』群の10クラスに分けられた。また、自己肯定感と親の養育態度の関係について、Pearsonの相関係数から、自己肯定感と[努力場面におけるポジティブな関わり] ($r=.51, p<.01$), [失敗場面の受容・指導] ($r=.32, p<.01$), [意欲承認] ($r=.43, p<.01$), [楽観的] ($r=.22, p<.01$), [気持ちへの寄り添い] ($r=.30, p<.01$)。自己肯定感と[優しさ] ($r=.29, p<.01$) との間には有意な正の相関が、[放任] ($r=-.48, p<.01$), [叱咤] ($r=-.21, p<.05$) との間には有意な負の相関が見られた。10クラスを独立変数、自己肯定感尺度得点を従属変数とした1要因分散分析の結果、クラス間で有意差があり ($F(2,128)=4.24, p<.001$)、多重比較から、『叱咤・放任』群は『関わり・要求高』群、『叱咤・激励』群、『子どもへの寄り添い』群、『賞賛』群よりも、『無関心』群は『子どもへの寄り添い』群よりも有意に自己肯定感が低いことが示された。

考察

[努力場面でのポジティブな関わり]が自己肯定感を高めることが明らかになった。この養育態度を構成する具体的な養育行動から、テストや体育、工作など努力場面で、子どもを褒めたり一緒に喜んだり励ましたりという養育行動が自己肯定感を高めること、失敗しても「次は頑張れ」と励まされることで次への意欲につながり、自己肯定感を高めていると考えられる。一方で、自己肯定感を低める養育態度として[放任]があり、どのような場面においても「何も言わない」という態度は自己肯定感を低下させることが明らかとなった。

臨床心理学的意義

本研究において、具体的な場面や養育行動を設定し得られた結果は、具体的な対応の仕方を求められる現在の子育て支援において、有効な一助となると考えられる。